

浄泉寺通信

第13号
 年4回発行
 浄土真宗本願寺派
 吉見布教所浄泉寺
 埼玉県比企郡吉見町
 久保田40-1
 発行責任者 福井学誠

今年もお盆の季節になりました。

盆踊りの盆と語源は同じですが、お皿や茶碗を載せるお盆に由来しているわけではなく、古代インドのサンスクリット語「ウツランバナ」が、

中国においてその音から「盂蘭盆」と漢字が当てられるようになった言葉が元になっています。ウツランバナとは「逆さまに吊るされること」という意味で、それには次のような故事が伝わっています。

ある日のこと、お釈迦さまのお弟子のひとり目連尊者は、亡き母が目連可愛さのあまりに他人に対する吝嗇の報いで、餓鬼道(常に餓え、苦しまねばならない世界)に落ちて、逆さまに吊るされていることを神通力で知り、何とかして救いたい

とその方法をお釈迦さまにお尋ねしたところ、雨期(旧暦4月半ばから7月半ばまでの三か月間)明けに修行者たちに供養すれば救われるとお釈迦さまはお教えになりました。そしてお釈迦さまの教えに従った目連尊者は、その功德によって母

親に極楽往生を遂げさせたというものです。この故事にちなみ旧暦

7月15日前後が両親や祖父母、ご先祖さまに報恩感謝し、その供養を通して功德を積む重要な日となりました。

現在のお盆は7月または8月の13日から16日までを指します。この4日間は釜の蓋が開いて地獄は空っぽになるとまで言われ、各家庭では13日夕方に迎え火を焚いて先祖の霊をお迎えし、期間中に僧侶を招きお経や飲食の供養し、16日夕方に送り火を焚いてご先祖さまにお帰り頂くとするのが一般的ですが、浄土真宗では供養を縁に自身

のいのちを見つめる期間といただき、ご先祖さまはお盆の期間にだけ帰ってくるという考え方をいたしません。浄土に生まれるのも、浄土から娑婆へ還るのも人知を超えたはたらきといたただかれた親鸞聖人は、俗信を厳しく戒められました。そもそも、わが国最初のお盆の行事は、推古天皇の14年(606年)、

奈良県明日香村の飛鳥寺で行われたと伝えられます。これは、仏教がわが国に伝来したばかりの時代です。ご先祖さまを供養する風習は仏教伝来より以前からあったわけですから、見方を変えれば、それまでの間さまさまな形で行われていた風習を仏教が取り込んだのかもしれないし、または中国朝鮮から伝わった仏教が日本をひとつにまとめたため

お盆を考える

に市民生活も豊かになり、ロウソクや提灯も安価になったこと、また檀家制度が定着したことなどから、お盆の行事が広く一般にも定着しました。夏の京都の風物詩である五山の送り火も江戸時代までに定着したようですが、お盆の日を中心に全国各地で行われる打ち上げ花火や盆踊りもご先祖様へのさまさまな供養のこころを形にしたものだと言われています。

天皇家の菩提寺として有名な京都の泉涌寺では、昭和天皇をはじめ歴代天皇の位牌や尊像をいまもお祀りして、お盆の法要を毎年7月にお勤めしておられ、この法要には皇室の代理として宮内庁京都事務所からの参拝が続いています。奈良時代の聖武天皇から江戸時代末期の孝明天皇までの葬儀は仏式で勤められていて、天皇家と皇室の宗旨が仏教から神道へ改められたのは明治時代、神仏分離と廃仏毀釈が進められたことと深く関係します。幕末の尊王攘夷運動の精神的な柱になった国学や水戸学のなかから、新しい「日本のこころ」を明治新政府は神道に求めました。京都御所のなかにあった仏間「お黒戸」には歴代天皇と皇后の位牌が祀られていましたが、京都から東京への遷都、それにともなって旧江戸城が宮中と変わるなかでお黒戸は泉涌寺に移され、宮中には新たに神殿が整備されました。こうして歴史を見ますと、私たちの生活のなかの供養の形も、今後ますます変わっていくことでしょう。それも、ますます宗教色をもたない姿に。そしてお盆の行事の由来や名前の由来を知る人は減り、最後に残るのは、盆休みという言葉だけになるのかもしれない。(任職)

わくわく子ども会を 開催

お釈迦さまの誕生を祝う「花まつり」に合わせ、4月6日「わくわく子ども会」を開催しました。これは疎遠になりがちな大人同士を結ぶこと、ゲームやテレビの無いひと時を子どもたちと過ごすこと、そして何より仏様に手を合わせる尊さに大人も子どもも触れてもらいたいとの願いで開催しているものです。この日は子ども8名、父兄8名の皆様にお越しいただきました。使用済み葉書を使った紙飛行機

づくりなど、ペーパークラフトをみんなで体験しました。左の写真をご覧ください！次回は8月3日を予定しています。



本願寺25代門主に就いた 大谷光浄さん

浄土真宗を開いた親鸞聖人の子孫にあたり24代門主の長男として、これまで築地本願寺副住職などの重責を担ってこられました。地方では人口減や高齢化で門徒が減少都市部では核家族化が進んで次世代へ信仰が受け継がれにくくなっています。そんななかで「でも生

老病死などの苦しみは時代や地域を問わず共通。苦しみを抱えながら生き、救われる道を示す浄土真宗の教えは現代に通じます」と話す。36歳、京都市生れ。妻と一男。



【浄泉寺の今後の活動】

- 7月12日(土)11時
盂蘭盆会 (お盆の法要)
(築地本願寺・東京・中央区)
※出欠の返信葉書をまだお出ししていない方は、早目にご投函願います。7月7日締切です。
- 7月18日(金)19時 (毎月開催)
親鸞聖人御消息講座(第9回)
(フレサよしみ・埼玉県吉見町)
- 8月3日(日)10時
わくわく子ども会[子ども寄席]
(浄泉寺本堂)
- 8月9日(土)14時
盂蘭盆法要 (浄泉寺本堂)
- 8月16日(土)14時
写経会 (浄泉寺本堂)
- 9月19日(金)19時
親鸞聖人御消息講座(第10回)
(フレサよしみ)
- 9月20日(土)14時
彼岸会 (浄泉寺本堂)

■10月4日(土)14時

いのちの講演会[講師 高史明氏]
(フレサよしみ小ホール・埼玉県吉見町)

毎年10月に開催している「いのちの講演会」、今回のご講師は作家の高史明さんです。高さんは1932年山口県下関市生まれの在日朝鮮人二世。厳しい民族差別と貧困、暴力、孤独のなかを生きてこられ、さまざまな職業を経て作家生活に入られました。岡百合子さんとの間のひとり息子だった真史くんが12歳で自死し、その悲しみが契機となって親鸞聖人の教えに傾倒。著書は岡百合子さんとの共著の遺稿詩集『ぼくは12歳・岡真史詩集』、在日としての生き様を語った『闇を喰むく1> 海の墓』など多数。最近では2010年に900ページを超える大著『月愛三昧—親鸞に聞く』が話題に。入場無料、定員100名となっております。お気軽に、お誘いあわせのうえお越しください。詳しくは、お寺まで。TEL 0493-54-8803

